

『奔馬』の小説構造可視化

— 三島由紀夫『豊饒の海』の絵解き —

谷口敏夫*¹

1 はじめに

三島由紀夫の長編『豊饒の海』のうち、その第一巻『春の雪』の小説構造はすでに可視化*²した。本論ではその第二巻『奔馬』の分析と可視化とを試みた。

『奔馬』は全四巻の中では「武」をあらわしたもので、『春の雪』の「雅」に比較して三島の晩年の急激な行動により近いものがある。作品としては2.26事件を扱った『憂国』『英霊の声』や、剣道をテーマにした『剣』と近い。

『春の雪』とこの『奔馬』とは、三島由紀夫の作品の中でも傑出した小説と考えている。その理由は、この二作が非常にバランス良く対照と継承とを実現させた作品だからである。清きよあき頭いさおに対して勲みやびの配置、両者は雅と武とに対応する。少し年上の綾倉あやくら聡さとこ子には、一回り年上の鬼頭きとう楨たけ子こがいる。継承には、転生の証し「黒子」や清頭の夢日記内容の現実化がある。清頭の書生は勲の父となり、本多は二人の輪廻を間近に見る。これらの対照と継承とは作品の重層性をまし、小説世界の奥行きと広がりを読者にもたらす。

清頭の不明瞭さを残す夢日記内容が、19年後に再読する本多の眼前で明確な現実を形作っていくのは、見処であろう。『春の雪』の夢幻の言葉「今、夢を見ていた。又、会うぜ。きっと会う。滝の下で」が、三輪山の玄妙な滝で現実化する場面は、深い感銘を与える。

以上の鑑賞は、本論の方法論によっても検証された。

* 1 京都光華女子大学文学部教授、情報図書館学専攻、司書科目担当。taniguti@koka.ac.jp

* 2 谷口敏夫「『春の雪』の小説構造可視化」京都光華女子大学研究紀要、39(2001.12)
<http://www.koka.ac.jp/taniguti96M/0/30/2001/Misima2001/Misima2001.html>

2 実験・調査の目的と方法

本論の目的は、長編小説の全体構造を登場人物、および読み解く鍵となる用語（鍵語）によって可視化し、把握することである。このことから、小説の構造や流れが理解でき、作品のより深い鑑賞を可能とする。

方法は、従前使ってきたKT2システム^{*3}での文章内位置付き用語抽出を基本にし、マイクロソフト社のエクセルによる等高線グラフで文章地図^{*4}をつくり、クラスター分析^{*5}を行った。これらは前回の論と大きな変化はない。ただ、3点についてはこれまでよりも工夫を重ねた。

一つは、従来は可視化するために等高線図を平面地図として利用してきたが、今回からは立体化を試みた。また二つは、これまで地図化する際のY軸（縦軸で登場人物や鍵語を置く）の順序に腐心してきたが、今回からはクラスター分析で得られたクラスターの序列をそのまま立体地図（図6）にも用いた。三つは、人物の名寄せなどを対象に、用語の群調査をKT2で容易に出来るように、システムのうちKTCrossを改善し用語群採取の機能をもたせ、これによって操作の向上を図った。

調査に使った小説は新潮社文庫によった。『奔馬』は実質440頁あり、全40章、四百字原稿枚数851枚（440x18行x43文字）の長編小説^{*6}である。そのあらすじを新潮社の案内記事から引いておく。

第二巻 奔馬

今や控訴院判事となった本多繁邦の前に、松枝清顕の生れ変りである飯沼勲があらわれる。「神風連史話」に心酔し、昭和の神風連を志す彼は、腐敗した政治・疲弊した社会を改革せんと蹶起を計画する。しかしその企ては密告によってあえなく潰える……。彼が目指し、青春の情熱を滾らせたものは幻に過ぎなかったのか？—

-
- * 3 谷口敏夫「KT2の世界」<http://www.koka.ac.jp/taniguti96M/0/20/KTCoder/KTCoder.html>
KT2に関しては、川端亮「コンピュータ・コーディングによる宗教的ライフヒストリーの記述」宗教と社会、七号、2001.6 あるいは、景山佳代子「KT2コーディングシステムによる雑誌分析」年報人間科学（大阪大学大学院人間科学研究科）、23（2002.3）などがある。
- * 4 谷口敏夫「日本語文章の可視化：保田與重郎『日本の文學史』」、光華女子大学研究紀要、38（2000.12）、に詳しい。
<http://www.koka.ac.jp/taniguti96M/0/30/2000/Yasuda2000/Yasuda2000idx.html>
- * 5 システムは「Let'sStat!Pro」。 <http://member.nifty.ne.jp/QZM01222/LetsStat/lsIndex.html>
- * 6 テキストは500Kバイト程度。総出現語数は28062件、異なり語数は10024種で、異なり比率は35.72%となる。

一若者の純粋なく行動>を描く『豊饒の海』第二巻。

629円（本体）／105022-8

<http://www.shinchosha.co.jp/20century/105021-X.html>（2002年9月採取）

3 文章地図

表1に、KT2システムで作品から抽出した用語のうち、頻度数20以上のもの137例をあげた。前回は頻度数20以上が105例あった。用例は人名が上位を占め、裁判関係の用語がいくつかあった。また神風連、神風連史話の2用語が特徴的だった。しかし、これらの傾向については後節にゆだねる。

表1 用語の頻度

862	勲	64	夢	36	最後	28	場合	23	今度
440	本多	64	志	35	思い出	28	手紙	23	一挙
309	自分	60	裁判長	35	罪	28	自刃	22	倅
250	彼	59	百合	35	海	28	幻	22	梨枝
180	私	57	人間	33	突然	28	宇気比	22	陛下
178	飯沼	53	気持	33	相手	28	以幾子	22	拝殿
163	佐和	52	命	33	世界	27	郵少	22	転生
159	櫛子	52	息子	33	裁判官	27	瞬間	22	滝
157	顔	52	相良	33	妻	27	十分	22	神秘
146	一人	51	若者	33	一党	27	感動	22	時代
142	中尉	51	感情	33	一度	26	殿下	22	侯爵
121	死	50	金	33	みね	26	先生	22	学生
112	宮	48	神風連	32	北崎	26	神風連史話	21	歴史
111	清顕	46	今日	31	問題	26	自然	21	理由
104	家	46	夏	31	自身	26	子供	21	被告
103	光	45	火	31	行為	26	三人	21	秘密
101	蔵原	44	堀中尉	31	剣道	26	玄關	21	太陽
101	言葉	44	事件	31	決行	25	世間	21	場所
91	同志	44	危険	31	意味	25	証人	21	若様
84	井筒	43	日本	30	良人	25	思想	21	仕事
79	父	43	太田黒	30	一方	24	本多弁護士	21	芹川
78	若	42	検事	30	一同	24	父親	20	裏切
75	二人	41	記憶	29	塾生	24	年齢	20	返事
72	少年	40	汗	29	現実	24	中止	20	精神
71	女	39	部屋	28	不安	24	事実	20	時間
71	純粋	38	本当	28	必要	24	軍人		
67	花	37	匂い	28	沈黙	23	靖献塾		
66	名	36	青年	28	短刀	23	酒		

3.1 用語の分類

表1には不要語と思われる用語が多数あるので、全体の傾向をつかむために、137用例を八つのクラスに分類しそれを表2とした。この分類は上位語を種子に

し帰納的*7に行った。これは経験則に従うヒューリスティックスである。

表2 『奔馬』用語の分類

人物	奔馬鍵語	裁判	三島鍵語	抽象語	一般語	その他	不要語
862 勲	91 同志	60 裁判長	121 死	104 家	157 顔	309 自分	46 今日
440 本多	64 夢	44 事件	103 光	101 言葉	78 若	250 彼	39 部屋
178 飯沼	64 志	42 検事	72 少年	44 危険	57 人間	180 私	38 本当
163 佐和	48 神風連	33 裁判官	71 純粹	43 日本	53 気持	146 一人	36 最後
159 槇子	31 決行	25 思想	71 女	33 世界	51 感情	79 父	33 一度
142 中尉	31 行為	25 証人	67 花	31 意味	28 手紙	75 二人	33 突然
112 宮	29 塾生	24 本多弁護士	66 名	29 現実	25 世間	52 息子	31 問題
111 清頭	28 宇氣比	21 被告	59 百合	28 沈黙	24 年齢	33 一党	30 一方
101 蔵原	28 自刃		52 命	28 不安	23 酒	33 妻	28 必要
84 井筒	28 短刀		51 若者	22 時代	22 学生	33 相手	28 場合
52 相良	26 神風連史話		50 金	21 秘密		31 自身	27 十分
44 堀中尉	24 軍人		46 夏	21 歴史		30 一同	27 部分
43 太田黒	24 中止		45 火	20 時間		30 良人	27 瞬間
33 みね	23 靖献塾		41 記憶	20 精神		26 三人	27 感動
32 北崎	22 滝		40 汗			26 子供	26 玄関
28 以幾子	22 転生		37 匂い			24 父親	26 自然
26 殿下	22 拝殿		36 青年			22 悴	24 事実
26 先生	20 裏切		35 海				23 一挙
22 梨枝			35 罪				23 今度
22 陛下			35 思い出				21 仕事
22 侯爵			31 剣道				21 場所
21 若様			28 幻				21 理由
21 芹川			22 神秘				20 返事
			21 太陽				
2744	625	274	1235	545	518	1379	655

○人物

「勲」以下23件挙げたが、後述する名寄せを必要とする。主人公の飯沼勲、転生観察者の本多繁邦が上位にある。頻出語は重要性を低く見られるが人名については全く逆の考えを求められる。

3番目の「飯沼」は飯沼勲ではなく、ほぼ、勲の父「飯沼茂之」（靖献塾塾頭*8）である。三島の正確な文章の一端であろう。6番目の「中尉」は、これも12番

*7 この帰納的分類は、長尾真著『人工知能と人間』を調査した際に以下記事の「●分類」で説明した。

谷口敏夫『『人工知能と人間／長尾真』のテキスト可視化：KTシステムによるテキスト分析』
<http://www.koka.ac.jp/taniguti96M/0/30/2000/Note2Nagao/Note20000409.htm>

*8 このような国粋団体の塾頭には、かつての大東塾塾頭影山正治氏、その父「庄平」氏を彷彿とさせる。影山正治『民族派の文学運動』「神兵隊事件と獄中生活」（昭和40年、大東塾）には、「僕は七月十一日未明、明治神宮表参道明治神宮講会館（戦災で消失）に集結したところを同志諸君とともに検挙され、一旦原宿警察署に連行された上で即日神田錦町警察署に留置された。」p250、とある。

目の「堀中尉」を指す。中尉の階級を持つ軍人は多数でてくるが、他は「○○中尉」と言うように、正確に区別してある。

13番目の「太田黒」と、16番目の「以幾子」とは、作中「神風連史話」の中に出てくる人物で、『奔馬』そのものの登場人物ではない。また15番目の「北崎」は将校下宿屋の主人であると同時に、下宿屋の名称としても使われている。人名と下宿屋名とは同値とした。

○奔馬鍵語

18件挙げた。作中の「神風連史話」に依存して帰納分類した。神風連史話と無縁なのは「靖献塾、滝、転生」程度である。このことは逆に、『奔馬』における神風連事件の重要性を現している証左ともなる。

○裁判

8件挙げた。『豊饒の海』全巻の主人公は本多繁邦である。彼は『奔馬』の前半では裁判官であり、後半では飯沼勲を弁護するため弁護士となる。裁判は『奔馬』全体の3/4部分で一つのピークをもたらす。このため、裁判所関係の用語は目立ってある。またこれは、奔馬鍵語の一部をなしている。

○三島鍵語

24件挙げた。『豊饒の海』だけではなく、三島の多くの作品に見られる用語をここに入れた。「金」は黄金ではなく、金銭である。「百合」は奈良市での三枝祭で現れる。三島鍵語は全体として意味を持つものであり、現状では鍵語個々の検証は無視した。

○抽象語

14件挙げた。普通一般に用いられる用語ではあるが、三島作品全体を通して、語の背景に深層的意味を強く含んだものを選んだ。これは、三島鍵語の一部をなしている。

○一般語

10件挙げた。不要語に入れてもよいが、『奔馬』テキストの中で、それぞれ意味を持つ用語である。

○その他

17件挙げた。その他と言うよりも人称関連用語と明示したほうが分かりやすい。ただ、現状では各用語の照応先を特定する自然言語処理が困難なので、捨てるわけではないが、その他用語とした。

○不要語

23件挙げた。選定した上位137件の中では、いずれも表1のランキングの中位以下にあり、無視しても問題はないと思われる。

●用語の傾向

この表2の各頻度合計をグラフにした図1から、『奔馬』の傾向をみる。図1からは、頻度上位語(137/10024)の35%が人物で占められており、小説ジャンルの特性が顕著である。三島固有の用語は {三島鍵語、奔馬鍵語、抽象語、裁判} の合計で33%となり、人物とほぼ同じ割合である。一般語としては {一般語、その他、不要語} の合計で32%となる。

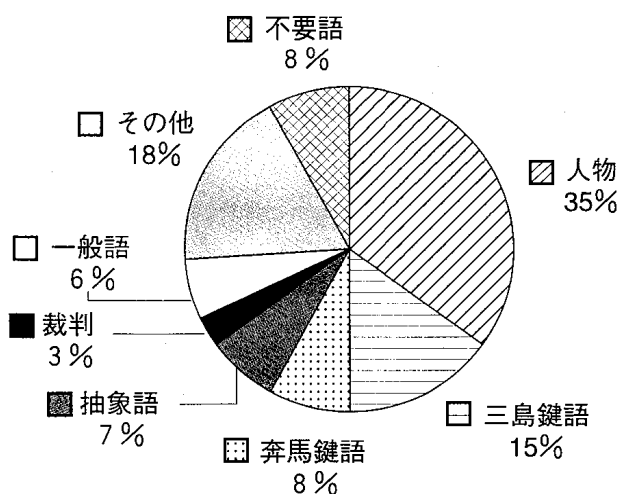


図1 『奔馬』用語の傾向

このことから、三島由紀夫の『奔馬』は用語の傾向として {人物、三島語彙、一般語} の割合がほぼ同値で、3分割されることがわかる。『奔馬』一作に限れば、{人物、奔馬鍵語、裁判} の合計で46%を占め、固有の用語頻度が高い作品といえる。すなわち、これは三島由紀夫の文学性を図る尺度となる。

●用語の地図（大分類）

図2に、これら表2の用語の出現傾向を大分類した地図を挙げた。

『奔馬』基本分類用語の大分類

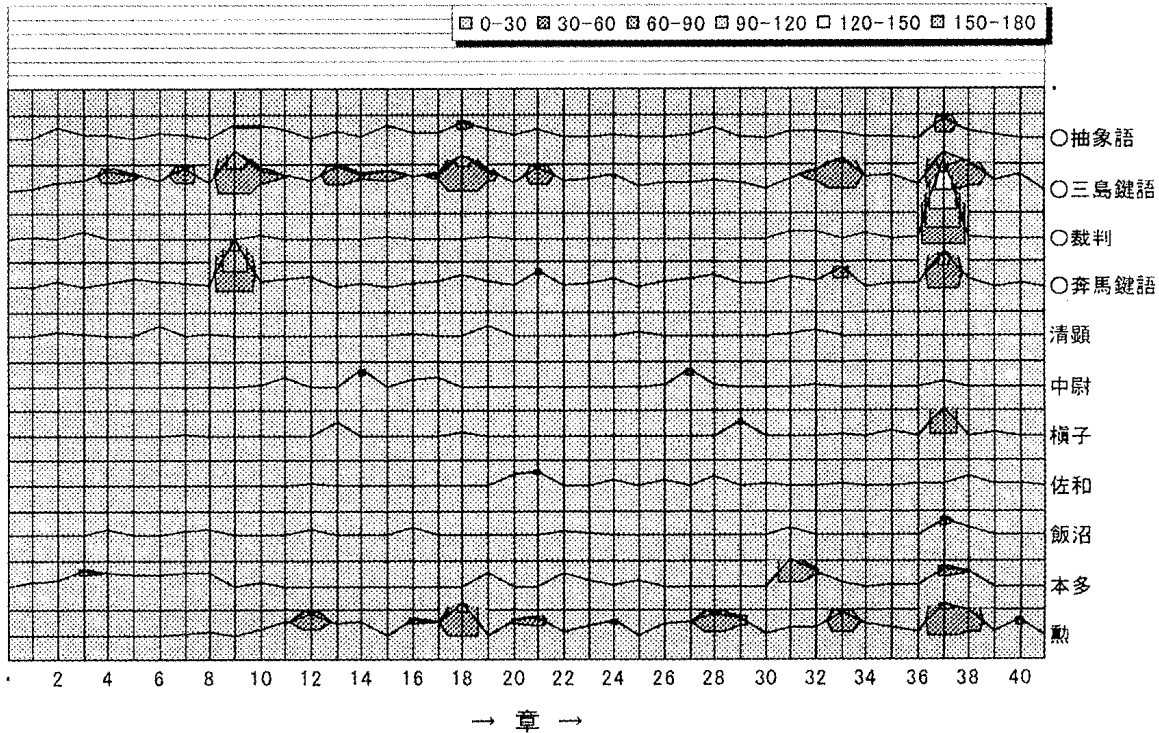


図2 『奔馬』基本分類用語の大分類

図2でY軸に挙げた用語は、人物、鍵語ともに『奔馬』にとって重要と思われるものを選んだ。図中○印は用語群を意味している。図2で特徴的なのは、37章で各用語が強く共起（図を縦にみると共時的分析ができる）している様子である。37章には饒舌なまでに重要語が密集している。「裁判」関係語が鋭く尖りを見せていることから分かるように、この章は昭和神風連を起こそうとした勲らの裁判場面で、本多繁邦はこのために裁判官を辞職し、勲の弁護士となって登場する。槇子は重要な証人として出廷するが、槇子の証言（偽証）によって、勲は刑を免除される。

他方、奔馬鍵語として選んだ用語は、この37章に至る前に、第9章でも高い山を示す。9章は、作中小説「神風連史話」が全てである。ここで史話を小説としたのは、作中著作者名「山尾綱紀」に関する言及が皆無であり、『奔馬』初版にも原典注がなく、文章は三島由紀夫に近い現代文であることから、推し

て小説と判定*⁹した。この9章、37章の二例から、『奔馬』が神風連の歴史に多くを負っていることが分かる。

他には、裁判の後に38～40章を残すところに特徴がある。特に図2の最終40章には、重要な人物がすべて姿を消し、勲だけが小さな孤立した「点」として現れている。これらは後述する。

以上、大分類した結果を地図化することでいくつかの特徴がうかがえた。

3.2 人物の認定

上位頻出語のうち35%を占める人物について、さらに分析し人物を確定する。これは「名寄せ」作業でもある。名寄せの詳細を表3に記した。

○飯沼勲^{いいぬまいさお}

勲は『奔馬』の主人公飯沼勲をさしている。19歳で、昭和神風連たらんとし、蹶起直前に捕られる。本多繁邦は勲を『春の雪』の主人公松枝清頭^{まつがえきよあき}の転生と、やがて信じていく。

表3の表記のうち「飯沼君」は一カ所が父の飯沼茂之を示し、他方が飯沼勲をさしている。この区別は本文に頼るしかないが、これを特定する自動的な手法がないので、このまま勲にあげた。

○本多繁邦^{ほんだしげくに}

『春の雪』の主人公松枝清頭の友人である。清頭の転生を観察する者として、全巻の主人公と考えて良い。それは継続する三巻『暁の寺』、四巻『天人五衰』でさらに顕著となる。

松枝清頭が三島由紀夫の雅や美に対する一つの見識の結果と考えるなら、飯沼勲は三島の武に対する見識の結果となる。両者は現実世界でともに矯激であ

* 9 宮崎正弘（『三島由紀夫『以後』、並木書房、1999.10）によれば、三島が『奔馬』執筆に際し、「熊本入りの前に三島はすでに木村邦舟『血史』、小早川秀雄『血史熊本敬神党』、石原醜男『神風連血演史』に目を通しており、古本屋で入手した『桜園先生遺稿』、荒木精之篇『神風連烈士遺編』、加屋霽堅『廃刀奏議書』なども通読していた。このことは初対面の荒木をたいそう驚かせる。」p109、とある。おおよそ、勤勉な三島はこれらを精読し、自ら『神風連史話』を創作したのであろう。

松本徹『三島由紀夫の最期』文藝春秋、2000.11、では「『神風連史話』（三島の創作であろう）」p62、と記している。

表3 名寄せ表

862	勲	178	飯沼	101	蔵原
19	飯沼少年	8	飯沼茂之	10	蔵原武介
9	飯沼被告	6	飯沼先生	1	蔵原武介氏
4	飯沼選手	192	飯沼小計	1	蔵原武介暗殺
2	飯沼君			1	蔵原暗殺
1	飯沼三段	163	佐和	114	蔵原小計
897	勲小計				
		159	槇子	84	井筒
440	本多	4	鬼頭槇子		
24	本多弁護士	163	槇子小計	52	相良
3	本多繁邦				
2	本多先生	112	宮	43	太田黒
1	本多本人	4	洞院宮	9	太田黒伴雄
1	本多繁邦氏	2	洞院宮治典王殿下	52	太田黒小計
1	本多裁判官	2	治典王殿下		
1	本多君	1	洞院宮様	33	みね
473	本多小計	1	洞院宮殿下		
		122	治典王小計	32	北崎
142	中尉			1	北崎玲吉
44	堀中尉	111	清顕	1	北崎証人
9	堀	5	松枝清顕	34	北崎小計
3	堀陸軍歩兵中尉	1	松枝清顕之墓		
1	堀陸軍中尉	117	清顕小計		
1	堀中尉殿				
200	堀中尉小計				

り、夭折する。それならば、本多繁邦はどのような距離を作家三島由紀夫と保っているのかという疑問がわく。おそらく、本多繁邦はもう一人の平岡公威*¹⁰として、それは二十代に大蔵官僚を辞めなかった世間的なインテリとして位置づけられるのではなかろうか。無論、作中の本多繁邦は長生するが、精神的には破綻する。

ここには「本多裁判官」も含めている。本多を人物と奔馬鍵語「裁判」に分ける考えもあるが、今回は両方のカテゴリーに重複して用いた。裁判関係者であると同時に、本多繁邦という転生観察者であることに重きをおいた。

○堀中尉

これは「堀陸軍歩兵中尉」を指す。かつて松枝清顕と綾倉聡子とが密会した

*10 三島由紀夫の本名、実生活者平岡公威（きみたけ）としての人生は別途考える必要がある。平岡は東大法学部を卒業後大蔵省に入省し、1年を経過せず退職し作家となった。

麻布三聯隊裏の軍人下宿北崎に住んでいる。勲を洞院宮に接見させる。勲らの精神的指導者でもあったが、満州に転任し蹶起からは去った。

○飯沼茂之^{いぬましげゆき}

かつての松枝侯爵家書生。女中みねと出奔し勲の父となる。現在は靖献塾塾頭^{せいけん}。

○佐和

靖献塾での、年長の塾生。勲の話相手。勲らの蹶起に荷担し、山林を売却し資金を寄付する。勲らに短刀での暗殺の仕方を教える。

○鬼頭槇子^{きとうまきこ}

軍人歌人鬼頭中将の娘。離婚歴のある三十代半ばの歌人。勲らの蹶起を事前に飯沼茂之に漏らす。勲とは姉弟の間柄だったが、やがて明確な恋人となった。

○洞院宮治典王^{とういんのみやはるのりおう}

かつての、綾倉聡子の婚約者。堀中尉と親しい。陸軍青年将校に人望がある。

○松枝清顕^{まつがきよあき} 『春の雪』主人公。

○蔵原武介^{くらはらぶすけ}

財界巨頭。勲によって暗殺される。現実を見据えた剽軽な知性人である。

○井筒、相良 とともに勲の友人。

○太田黒伴雄^{おおたぐろともお}

作中小説『神風連史話』に現れる、神風連の乱における中心人物。神官であり、宇気比によって蹶起の是非を占う*11。

○みね

もと松枝侯爵家女中。飯沼茂之と出奔し、飯沼勲の母となる。

○北崎

麻布三聯隊裏の軍人下宿主人。裁判では無意識に勲を清顕の転生者として証言する。しかしこれを密かに認知するのは、本多繁邦弁護士だけである。

「名は存じませぬが、一番左におります若い人の顔に、どこか見おぼえがあるのでございます。たしかに家へ来た人にはちがいませんが、例の晩に来た人かどう

*11 ことにあたり神意を問う秘事、宇気比の詳細は9章にある。

かわかりかねます。ひょっとすると堀中尉とはちがう筋で、家へ見えたのじゃないかと思います」

「では、三浦中尉のお客ですか」

「いいえ。それともちがいます。どうも以前、家の離れ座敷へ女連れで来た若い人がありますが、それではないかと……」

「飯沼が女連れで来たのですか」

「しかとわかりませぬが、どうもその人のような……」

「それはいつのことです」

「それを今考えていたのでございますが、何でも、二十年あまり前に来たことがあるような気がします」(三十七章)

●登場人物地図

図3に人物のまとめとして、「登場人物」地図を挙げた。これは図2とは異なり名寄せの正規化をほどこしたものである。この図3から分명한ことがいくつかある。

図を縦にみる共時的視点から、37章で {勲、本多、堀、飯沼茂之、鬼頭槇子、清顕、井筒、北崎} という重要人物14名のうち半数7名が全員登場する。しかし治典王は出ない。ここは勲らの裁判の章で、治典王は皇族であるから、重要人物であるが話題に上がらない。

裁判の後に、なお勲は38、40章と登場する。そして38～40にかけての勲の出現パターンは蔵原と相似形を示している。ここで38章は勲の第一審、殺人予備罪の刑を免除されたことによる、飯沼家の団欒場面である。この38章という、裁判終了後の穏やかたるべき場面に年長の塾生佐和と財界巨頭蔵原とが共起するのは、小説構造上、終末への予兆を示している。

また『春の雪』で詳述した、空白共起^{*12}の章については、39章にも当てはまる。これは終了直前の準備章と考えられる。37章「裁判場面」という物語の結節点を挟み、前方36の空白共起章と、後方39の空白共起章があり、その直後に第40章として小説が完了するところに、三島の工夫が現れている。

*12 空白共起とは、重要な用語の出現がゼロに近い章を意味する。これは主に章の分量が少ないことなどにより発生するが、しかしその情報量が少ないことによって、逆に隠れた意味を顕すことがある。

『奔馬』登場人物

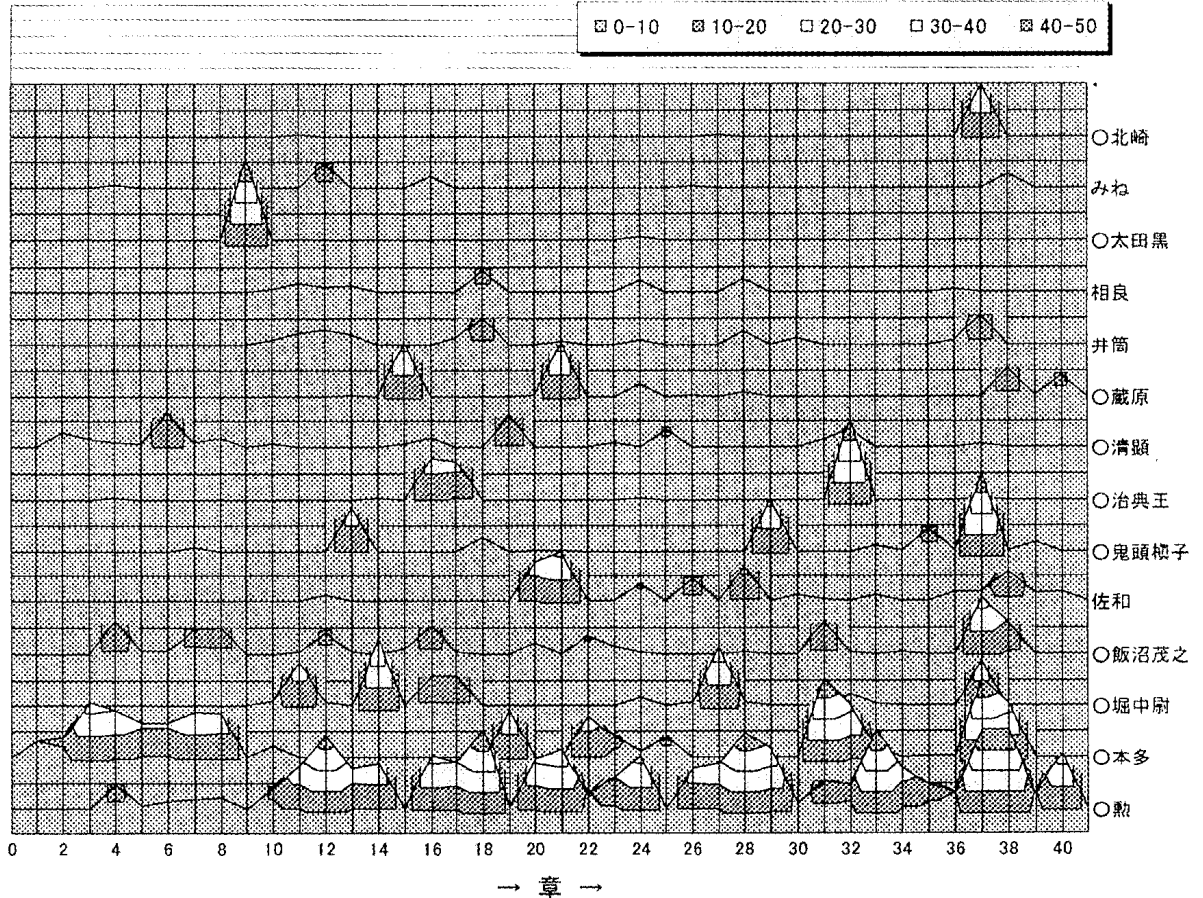


図3 登場人物地図

ここで、36章は3頁弱、37章が40頁、38章が14頁、39章が4頁、40章が8頁の構成になっている。全40章、441頁だから各章平均は11頁であり、この空白共起によるサンドイッチ状の36～40章が特殊な構成を取っていることが分かる。それは三島由紀夫が、全40章のうち最終部分の五章分で、頁の配分を周到に用意し、読者が物語世界に埋没することを工夫しているとも言える。章立てによる緩急のリズムを丁寧に使っている。

これに伴って登場人物も選ばれ、終末では勲と蔵原だけに焦点が合うこととなる。

この五章分の頁数を図4にグラフ化した。図では、裁判出頭前の36章は極端に書き込みを押さえ、その分を裁判場面で解放していることがわかる。その裁判の緊張を団欒の38章でやわらげる。しかしこの章には勲と蔵原の最後の「結

末」を予兆するような人物配置が凝らしてある。また、勲は父から蹶起を密告したことを打ち明けられる。39章で、佐和からそれを父にもらしたのが槇子であったと聞く。しかし勲は周りに対して無感動である。

そのまま、人々が勲の安定に安堵したとき、勲は最終章の決着を暗殺と自刃によってつける。

終章の最終行は「正に刀を腹へ突き立てた瞬間、日輪は^{まぶた}瞼の裏に^{かくやく}赫突と昇った」であった。

4 クラスタ分析

クラスタ分析の適用はすでに『春の雪』でのべた。ここでは『奔馬』について同じ分析を試みた。以下分析の対象とした人物及び鍵語は、それぞれ「3.1用語の分類」、「3.2人物の認定」で得たものを、勘案し選定した。

人物としては名寄せした表3から {勲、本多、飯沼茂之、佐和、鬼頭槇子、堀中尉、洞院宮治典王、清顕、蔵原、北崎} の十名を選んだ。

鍵語としては表2及び『春の雪』から {奔馬鍵語、{神風連、宇気比、自刃、軍人}、春の雪鍵語、{恋、唯識、輪廻、転生、夢日記、黒子}、靖献塾、滝} の13用語を選んだ。このうち、奔馬鍵語*¹³及び春の雪鍵語*¹⁴が、それぞれ要素用語を別立てしているのは、群として見る場合と、要素として見る場合とを区別しながらも、群を際立たせる要素を再確認するための試みである*¹⁵。

これらの用語をあらかじめ、概念群*¹⁶として表4にまとめた。これはテキスト解釈と、後述する図5のクラスタ分析の結果をまとめたものである。

章と頁『奔馬』

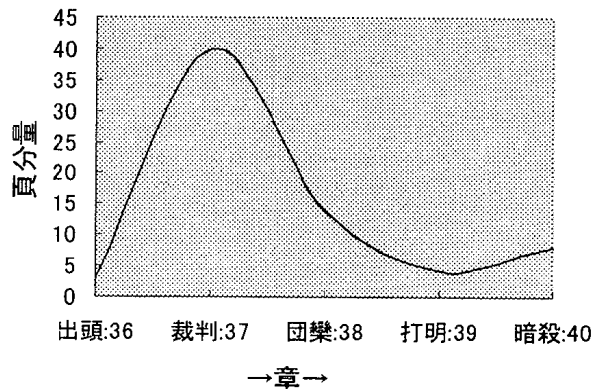


図4 終盤での章と頁

*13 「奔馬鍵語」は表2の18用語を総て含み、そこから {神風連、宇気比、自刃、軍人} を別立てした。

*14 「春の雪鍵語」は {恋、唯識、輪廻、転生、夢日記、黒子} が総てであり、各々をさらに別立てした。

表4 『奔馬』の概念群

(1) 昭和神風連 勲、 奔馬鍵語、神風連、 宇気比、自刃	(4) 春の雪 飯沼茂之、清顕、 春の雪鍵語、唯識、黒子、 夢日記、 北崎、恋
(2) 観察者本多 本多、 輪廻、転生	(5) 鬼頭槇子
(3) 洞院宮 堀中尉、 治典王、軍人	(6) 靖献塾 佐和、蔵原、 靖献塾
	(7) 滝

4.1 人物と鍵語のクラスター分析

図5は、主要登場人物と鍵語の関係をクラスター分析し樹図（デンドログラム）を描いたものである。手法はユークリッド距離およびウオード法によった。

鍵語の重み付けに関しては、『春の雪』では {恋、唯識、輪廻、転生、夢日記、黒子} の6用語を選び、清顕の総頻度数を50章で割り、さらにその半数9を、各章の頻度に乘し重みとした経緯がある。今回本論では、飯沼勲の総頻度数897を40章で割り、その半数11を上記6用語を含む『奔馬』鍵語の各章頻度に乘し重みとしている。

ここで樹図を、表4の概念群を軸にして解釈してみる。

まず小説構造が、(1) 昭和神風連と、(2) ~ (7) の二つに分かれていることに注目する。(1) では、主人公飯沼勲はかつての神風連の乱の甦りと見なせる。つまり『奔馬』は、まず昭和の神風連を描いた小説と言える。これが作中の「昭和神風連」の意味である。

*15 クラスター分析においては通常このような群と要素とを混入する方法はとらない。しかし本論はテキストという客観的な対象なので混乱は生じず、パターンを明示するための手法として用いた。

*16 概念群とは、小説が表現する諸概念の組み合わせ。各概念を代表する用語を「鍵語」として選定し、文章地図や樹図を作り、概念間の構造を可視化した。（『春の雪』の小説構造可視化より）

史実としての神風連が『奔馬』の世界で大きな比重を持つ。その最大の要因は主人公勲が常に神風連との距離を測る中に表現されていたからである。すなわちテキストの勲は如何に昭和の神風連を決行するのかという視点で描かれていた。図5には、勲と神風連のその関係が明瞭に現れている。つまり、勲が神風連をどのように評価し、自分たちの蹶起に生かしたのか、その結果がクラスターの類似として明瞭に描かれている。またこのことによって『奔馬』が『豊饒の海』の第二作であると同時に、独立した作品であることも現したことになる。『奔馬』は、輪廻転生をテーマとしているが、なお、神風連^{*17}を固有のテーマとして持っている。

他方 (1) に対応する (2) ~ (7) のクラスターで、中心となるのは (4) 春の雪である。(4) をまとめ上げているのは飯沼茂之である。彼は、清顕を救えなかった、清顕を理解できなかったという悔恨のまま『奔馬』に登場する。図5では、飯沼茂之が勲の父であることよりも、清顕との関わりの強さを示している。

やや独立している鬼頭槇子が何故 (4) 春の雪と、クラスターを近くしているのか。これは謎といえる。むしろ勲との関連があつて良いはずである。これはクラスター分析の錯誤とも言えるし、他方、槇子が勲の恋人であるよりも、『春の雪』での綾倉聡子の役割、すなわち聡子は清顕の恋人であり、同時に優雅の象徴であった、そのこととの関連を暗に示しているのかもしれない。『豊饒の海』全巻での、後半での槇子には老醜の無惨がある。それは四巻『天人五衰』の末尾に現れる聡子に比して際だった無惨さである。聡子は最期まで優雅を保つに比して、槇子の扱いは残酷でもある。しかし、この『奔馬』にあつて、槇子は歌人であり、百合の精であり、勲の姉の様な恋人であった。これらの雅

*17 作中の「神風連史話」について橋本治は『「三島由紀夫」とはなにものだったのか』新潮社、2002.1、第一章四節で酷評している。しかし、『奔馬』の中核の一つが史話にあることは、その史話を勲がどのように読んだか、使ったかを辿ることによって明確である。神風連史話は現在通読すれば、神風連神官の動きや志をよくあらわし、決して駄文駄作ではない。推量するに、橋本は史話の持つ狂気に辟易したのであろうか。全てが切腹で終わる史話は、現代環境では読むに値しないという評価が、一般にでも不思議ではない。しかし、文学が作品全体のバランスの中で特異な世界をつくることに対して、日常感性や倫理で評価すべきではないと考える。私は30数年前、現代小説のこの9章に異様な昂揚を覚えた。

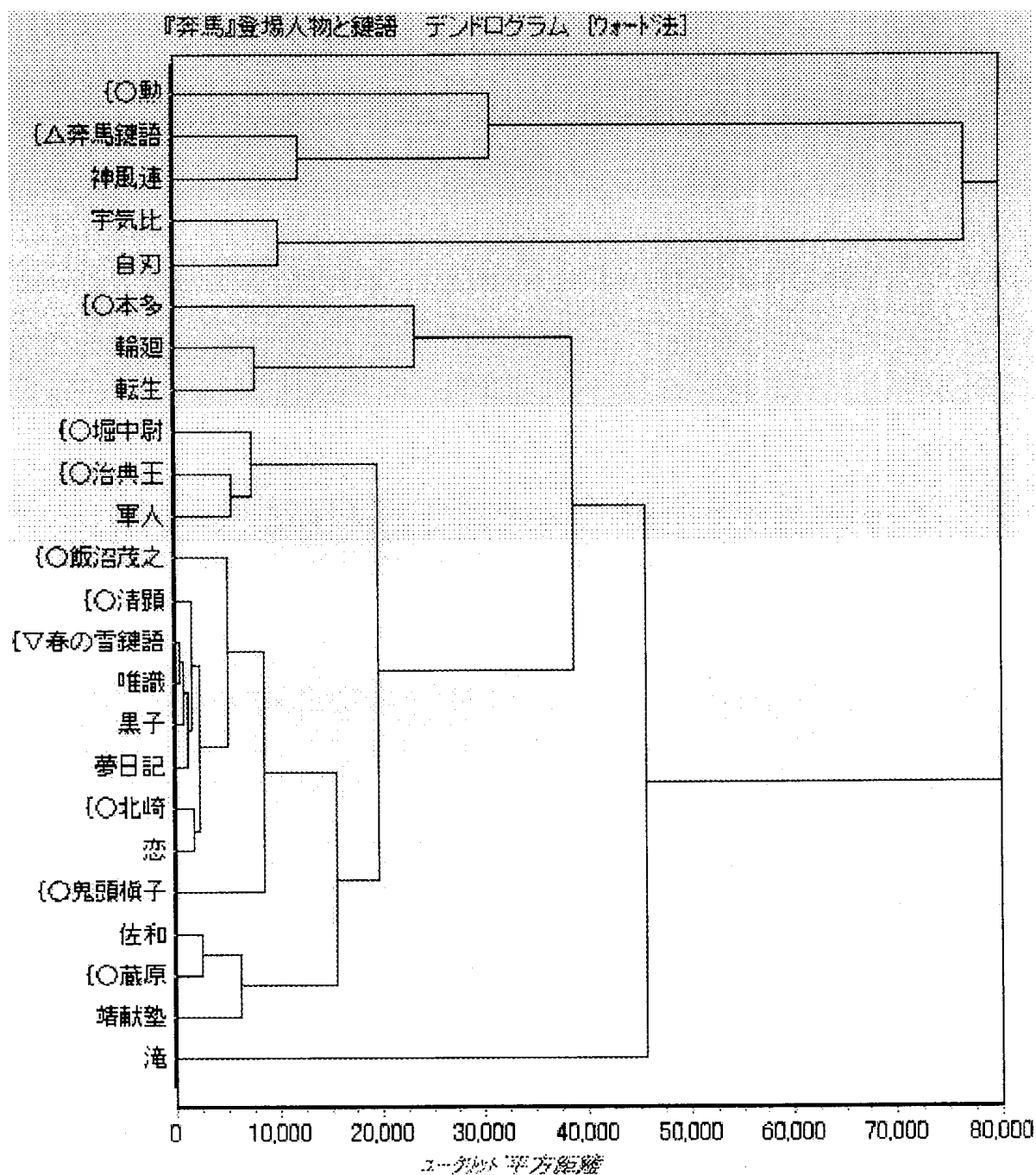


図5 登場人物と鍵語

の属性から、鬼頭槇子は『春の雪』という優雅を代表する鍵語群に隣接していると解釈する。

- (3) 洞院宮は、^{はるのりおう}治典王が過去（聡子との婚約破棄）を引きずっている故に、
 (4) 春の雪に近いと解釈する。(6) 靖献塾は、飯沼茂之を塾頭とする故に (4)

に近い。(2) 観察者本多は、輪廻転生という (4) 春の雪の継承を観察する者である。

(7) 滝の独立度は大きい。だが輪廻転生の夢解きの最大の見処が三輪山三光滝での、本多と勲との出会いであるとするなら、「滝」こそが輪廻転生の場を与えた特殊な風景であると是認できる。

4.2 『奔馬』概念地図

これまでの記述で、『奔馬』から登場人物、鍵語を選定し個別に解釈を加えた。ここでは、クラスター分析の結果を地図に応用すること、すなわち用語のY軸配置を正規化することについてまとめる。対象とするのは、すでにある樹図(図5 登場人物と鍵語)である。

これまで、長編小説などの長い文章を地図化するとき、X(横)軸に設置した「章」は比較的容易な決定をみ、またそれを地図として見る者にも不自然さを感じさせなかった。しかし、Y(縦)軸に設定してきた事項については、その順序をどう定めるかによって、地図の印象や直観を喚起するイメージが全く異なったものとなり、苦慮してきた。

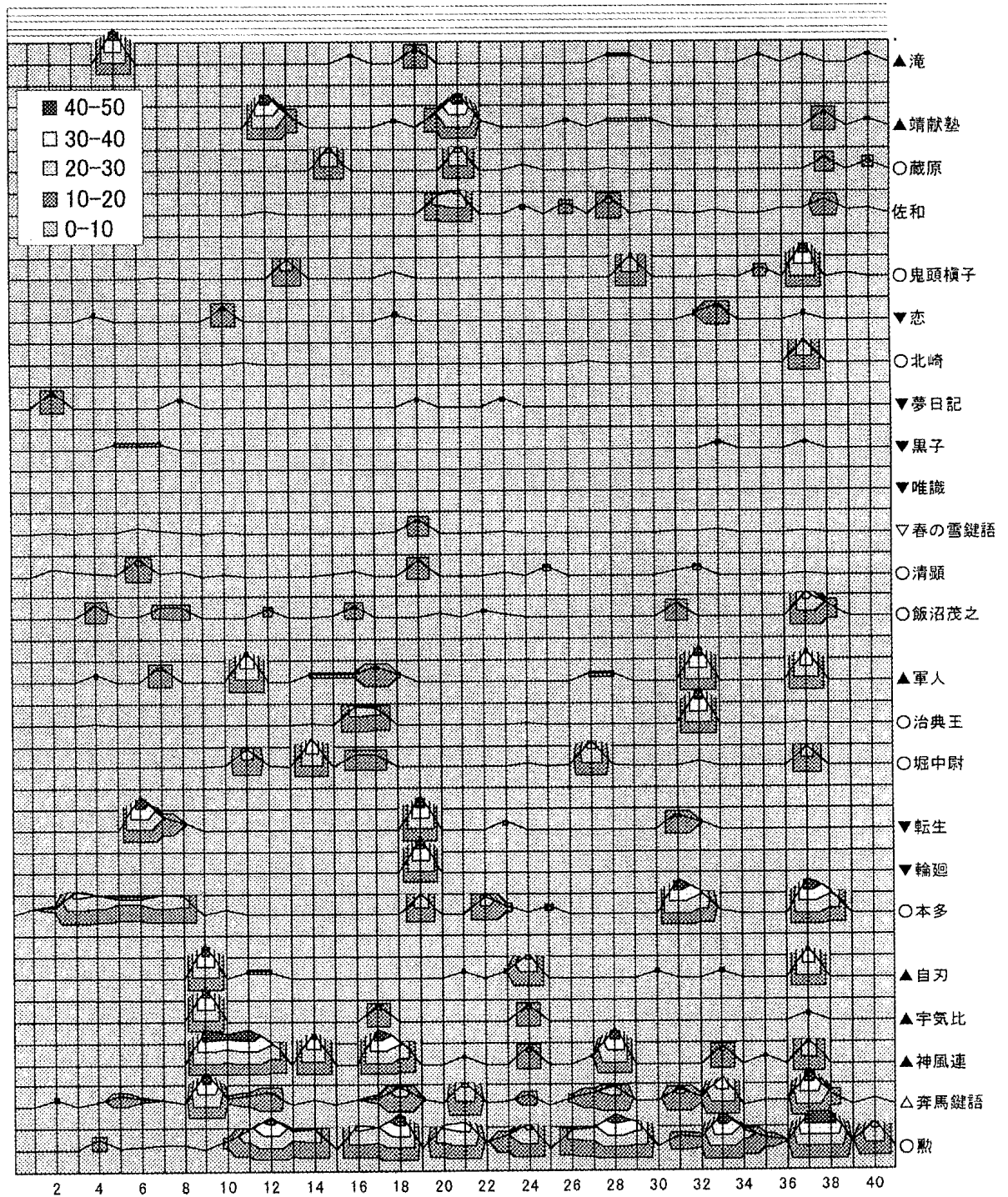
本節では、そのY軸に並べる事項をクラスター分析の類縁にしたがって並べる試みをした。

図6は、X(横)軸は従来通り章にし、Y(縦)軸にクラスター分析の樹図(図5)の項目順序を下方から上方に向けて配置した。この配置は、「なんらかの類縁」があるということの意味している。従前のように、頻度の高低が直接反映しているわけではないし、また恣意による配列でもない。類縁があるということはクラスターを形成していることであり、図5と照応すれば地図がより明瞭に分析できる。

○地図の解釈

まず全体としてみてみると、8章が前半の20%を現している。この部分までには『奔馬』固有のテーマが少なく、『春の雪』の19年後の承前という趣がある。1章から8章までの区間では、{本多、転生、飯沼茂之、清顕、黒子、夢日

『奔馬』人物と鍵語



→ 章 →

図6 人物と鍵語 (○人物群 △奔馬鍵語 ▲奔馬鍵語要素 ▽春の雪鍵語 ▼春の雪鍵語要素)

記、滝} がよく現れている。これらは総て『春の雪』のテーマを構成する概念群であった。それに比べれば、『奔馬』を構成する概念群 {勲、奔馬鍵語、神風連、宇気比、自刃} などがこの区間には少ない。ここに構造の変換がある。

○滝

滝が表れる5章は、本多と勲が奈良県櫻井市（現）、三輪山の三光の滝で出会う場面で、清顕の末期の言葉「今、夢を見ていた。又、会うぜ。きっと会う。滝の下で」に照応する。これは文学鑑賞として優れた箇所である。遠い日の、二十代のころの私の最初の印象では、この場面が映像としてしっかり刻みつけられた記憶がある。主観とは言いじょう、この記憶を大切に考えるならば、『奔馬』はこの5章で最初の高峰を設定し、それは成功したと言える。

○神風連

9章～37章の {神風連、宇気比、自刃} をみってみる。これは概念「神風連」と言える。三つの共起で目立つのは9章、24章、37章である。9章は一章分を使って「神風連史話」がある。24章は山梨県にある国粹主義者真杉海堂道場での合宿途中、勲が同志とともに人目をさけて昭和神風連の計画書内容を相談する場面である。37章は勲らの蹶起未遂に対する裁判である。

神風連は、三島由紀夫にとっては最も『奔馬』らしい深いテーマであったと判断できる。前述した図5の解釈に合わせて、一般に評者は言葉としての「神風連」で留まっているが、この思想を抜きにして『奔馬』も『豊饒の海』も解釈したことにはならない。近代思考のままだと、宇気比や自刃が頻出する神風連は理性の外に置いておきたくなるきらいがある。しかし、小説『奔馬』は神風連の思想を描いた作品であると断言して良からう。それは、この地図からみても「神風連」概念が全体章の約70%を覆っている事実から分かる。さらに付言するなら、この地図下段の勲が神風連に寄り添うパターンから見て、主人公飯沼勲はすなわち神風連であったと、言い切れるほどに明白である。

○重要な章

けだし、人智によって構成された文章は、明白な構造（ないし痕跡）を残す。

これが私の主張である。当たり前のことのように思うかも知れないが、可視化によってそれは客観的な事実であることを示す。特に、三島由紀夫のような理に勝った作者の手による作品^{*18}は、バランス、構造、がはっきりと顕れる。

以上、これまでの論考と図6から判定し、『奔馬』では9章、19章、37章、40章を重要な章とみとめた。

9章は、それにいたる8章分を『春の雪』から19年後の本多の現状についやし、承前とし、突然圧倒的な筆力で「神風連史話」が始まる。これは9章が主テーマの宣言であると理解できる。以後神風連は終盤まで持続する。

19章は本多による清顕の回想であり、それは転生者勲への傾斜であった。

「汐汲車わずかなる浮世に廻（めぐ）るはかなさよ」～（略）～

本多が光りの霧（き）らう舞台の上に見ているものは、もはや美しいシテとツレの、汐汲みの女たちの姿ではなかった。そこであるいは坐り、あるいは立って、月かげの中に異様に優雅な、徒労に充ちた仕事に携わっているのは、時代を隔てた二人の若者、遠目にはよく似て見えながら、近づいて見ればそれぞれの対蹠的な風貌が際立った、同じ年恰好の二人の若者だった。一人は竹刀胼胝（だこ）のできた武骨な指で、一人は白い遊惰な指で、かわるがわる、一心に時の汐を汲み上げていた。雲間を洩れる月影のように、時あって笛の音（ね）が、二人の若者の現身（うつそみ）を貫ぬいた。

この19章以降本多の関心は勲を清顕の転生、身代わりとしてだけではなく、勲自身の現身に惹きつけられていく。

37章は先述したが、裁判場面であり、『春の雪』関連以外の『奔馬』に特有な人物や鍵語が高頻度で表れる。終末にいたる少し前の、もっとも激しい表現部分である。内容からも頁数からも最高度の緊張感に導く章である。

40章は、蔵原と勲が登場することで結末に至る。お互いに顔も定かでない二人が終章で始めて出会い、双方の終末を迎える。

*18 三島由紀夫はバランスの天才とも言える。おそらく彼は出発地点で最終章までの全イメージとバランスのとれた構成とが脳内にあったように考える。あとはそれを記述するだけ、という感がする。しかし、詩とも散文ともつかぬと言われた保田與重郎による『日本の文学史』もまた、ジャンルの違いはあるが、意外なほど堅固な構成を持っていた。保田は、言うべき概念群をきっちり一本にまとめている。

しかし、ここに第三卷『暁の寺』に通じる回廊は閉ざされている。『春の雪』と『奔馬』とは、「滝」によって結ばれていたが、「正に刀を腹へ突き立てた瞬間、日輪は脛の裏に赫突と昇った」とは勲の日頃の想念、輝く海の見える所で、松を背に日の出を見ながら自刃したいという希望を、脛の裏に再現したものであって、『暁の寺』への太い道は閉ざされている。三巻でのヒンズー教徒の日輪は、勲とは隔絶していた。

おそらく、大正時代の『春の雪』は昭和戦前の『奔馬』で終了し、全四巻『豊饒の海』もこの二巻で一旦終わったものと思われる。昭和の戦後は無惨であった。

まとめ

『奔馬』の小説構造を、登場人物と鍵語によって分析した。

登場人物はほぼ頻度の高い者から、飯沼勲、本多繁邦、堀陸軍中尉、飯沼茂之、佐和、鬼頭槇子、洞院宮治典王、松枝清顕、蔵原武介、井筒、相良、太田黒伴雄、みね、北崎玲吉の14名を選んだ。このうちクラスター分析では、井筒、相良、太田黒、みねを除き、10名を対象とした。

鍵語としては、奔馬鍵語、神風連、宇気比、自刃、輪廻、転生、軍人、春の雪鍵語、唯識、黒子、夢日記、恋、靖献塾、滝の14件を対象とした。奔馬鍵語と春の雪鍵語については、各要素を別立てした。また「春の雪鍵語」の要素は前回『春の雪』で選定したものをそのまま使用した。

これら人物と鍵語とをクラスター分析、及び地図化によって可視化し、『奔馬』小説構造について、いくつかの結論を得た。

まず、「春の雪鍵語」が、第二作『奔馬』においても明白な概念を構成していることが、可視化の結果から分かった。このことから、『豊饒の海』全巻を通して、少なくとも最初の二巻は共通の鍵によって結ばれていることが分かった。

それに対して、『奔馬』固有の鍵語としては、神風連が大きな意味をもっており、本文に「昭和神風連」ともあるように、この作品は「神風連の乱」の現

代的（作中昭和初年）解釈であるとも言えよう。『奔馬』は作中の「神風連史話」無しでは了解できない作品である。

概念地図によって重要な章もいくつか判明し挙げたが、36章～40章の終盤には、三島由紀夫の小説構想力の一端が明瞭に現れており、三島の才能にあらためて感銘をうけた。特に、勲と蔵原の出現パターンに相似形を発見できたことは感に堪えない。

技術的には、長期にわたり可視化地図（エクセルによる等高線図）のY軸（本論では用語群の配置）処理に腐心してきたが、今回これをクラスター分析の結果をもって列挙することを決定できた。

謝 辞

大阪大学大学院人間科学研究科の川端亮氏には、クラスター分析による樹図の解釈についてさまざまな教示を得た。記して感謝する。

平成十四年九月三十日 谷口敏夫 識